

水澤だより

汎太平洋學術會議を見物に出かけた際山本先生にお目にかゝつて、水澤のこゝな毎月天界に書けさいふ仰を承つた。軽いゴシップでもいい、事務上の事でもいい、内容に制限はしないから兎も角書いて見るさいふお話であつた。例へば所長の木村博士は、近來新聞雑誌の上では、日露戦争をも知らずに緯度の観測をしたさいふここに相場がきまつてしまつた。が、ほんこの話は、戦勝祝賀の提灯行列に、先頭に立つて歩かれたのださいふ様な、罪のない素破抜もよからうさ先生はおつしやつた、それから又、観測所は空氣がいゝせい、子供がひつきりなしに生まれる、川崎技師には既に三人、山崎技師にはやがて三人、さいふつ風の、私事に渡る事も書いたつていゝぢやないかさおつしやるのである。書いていゝか悪いかは知らないが、こんな自慢にもならぬ話はなるべく内密にしておきたいものだ。然し、外ならぬ先生の仰、何はさもあれお受けせずんばなるまいと思ひ、それぢや書きませうと申上げた。

つらつら考へてゐるのに、東京からは天文月報、京都からは天界、神戸からは海と空、と、天體に縁のある所からは、

みんなそれぞれ自分自身の雑誌を出してゐる。なほに 水澤だつてそれ等に負けてゐるものか、もつさいゝものを發行する、さうすれば天界も天文月報も大恐慌をきたすにちがひない、と思ふのである。が、たゞさう思つてゐるばかりであつて、今に至るまで何も雑誌は出してゐない。のみならず、將來出さうさいふ様な陰謀さへ、私達毛頭も企てゝは居ない、天下は至極太平である。けれどまた、更にひるがへつて考へると、水澤の天地必ずしも事なきわけではない、一九二六年のたゞ一ヶ年の間にだつて、新しい天頂儀も來たし、リーフラーの上等も届いた。観測室をもう一つ建てるとには随分苦勞をしたのである。これ等のこゝ、だまつてゐるのは、燈をさもして斗の下に置く様なもので、何さなく惜しい氣がするよ同時に、山本先生御註文の、『水澤だより』には丁度あてはまつた材料だとも思はれる。そこで、さういふ様な事柄を、來月號からちびりちびり書きつゞけて見やうとおもふのである。

以上は『水澤だより』の書き初めに、先づその由つて來る所を明かにしたのである。 —十二月二十二日、お生—



水澤の誇り——雪!!